

じっきょう

地歴・公民科 資料 No. 81

もくじ	
巻頭	〈座談会〉「明治維新」の実相と歴史教育の課題を考える ／原田伊織・大庭邦彦……………1
トピックス1	地域づくりへの参加で育つ高校生たち —学力とシティズンシップの発達— ／宮下与兵衛……………7
トピックス2	日韓の教師がつくりあげた共通歴史副教材 ／平野昇……………12
図書紹介	……………16

巻頭

〈座談会〉「明治維新」の実相と歴史教育の課題を考える

原田伊織（作家）

大庭邦彦（聖徳大学教授）

司会 じっきょう資料編修部

はじめに

幕末維新时期を学習する際、「封建的な江戸幕府を倒した新政府が明治維新を成し遂げ、急速な近代化を進めて欧米列強の植民地化を免れた」という単純な図式で理解していないか。今回、『明治維新という過ち』（毎日ワンス、2015年）で問題提起をされた原田伊織氏と、幕末維新政治史研究も専門とされる大庭邦彦氏に、幕末維新の実像に迫っていただいた。今回の座談会で、次の歴史を読み直す必要性を感じる。①小御所会議以降、徳川側の先見性ある挽回があったこと。それでは困る岩倉・西郷・大久保らが武力的反撃で強引に倒幕は進んだ。②奇兵隊はじめ、戊辰東北戦争（会津藩救済だけが目的）の際に「官軍」がどのような非道な態度をとったのか。なお、安部龍太郎『維新の肖像』（潮出版社、2015年）では、長州藩が会津藩を徹底的につぶそうとした理由として、会津藩の松平容保（京都守護職）の信頼厚かった孝明天皇（公武合体を推進）を排除すること、イギリスとの密約（坂本龍馬はグラバー商会に頼まれてイギリスの「薩長同盟」支持を伝えただけ）があったことに触れている。

司会：高校生が使っている教科書に書かれた「明治維新」の記述について、全体的な印象を一言でいうと、どのようになりますか。問題点があるとすればどのような点でしょうか。

原田：全体的に言いますと、教科書によって歴史観のディテールは違いますが、どれも政変の記述の域を出ていないと思います。歴史の時間軸を江戸期からつなげて語ることが欠落しているのではないのでしょうか。私はこの時代に「国民」ではなく「皇民」をつくったというのが大きな問題だと思っていますが、そういう視点は無いですね。

大庭：明治維新时期は、教える側からするとやっかいなところで、1本の構図にするのは難しいです。どうしても狭い意味での政局史になってしまう。個別の問題についての研究は盛んで、新たなとらえ方も出てきています。ただ、全体としてみると従来の研究を乗り越えられない。教科書もしっかりということだと思います。

司会：原田先生は、「『明治維新こそが日本を近代に導き、明治維新がなければ日本は植民地化されたはずだ』という信じ込みがあり、明治維新は無条件に「正義」であり続けた。果たしてそうなのか。明治

維新の実相を知った上で、そのように確信したのか」とご著書で問題提起されています。本日は、いくつかの出来事の「実相」について原田先生にご指摘いただき、大庭先生に歴史研究者の立場からご意見をいただきたいと思います。まず、「開国」の時期についてはいかがでしょうか。

原田：実質的な日米交易は18世紀末から変則的な形ではあっても存在しましたが、政策転換としての開国という意味では「天保の薪水給与令」を以て「鎖国」を解いたとするのが妥当でしょう。しかし、時期がいつかということ特定することは大きな問題ではないと考えています。「天保の薪水給与令」には南京条約やアメリカの対メキシコ戦争などが背景にあり、確かに政策の転換があったとは思いますが、「開国」を考えるにはむしろ「鎖国」の実態、幕府の管理貿易という側面について知るべきでしょう。そのあたりは学校では教えているのでしょうか。

大庭：教科書はほとんど「鎖国」という言葉を使っていますよね。ただ、今は「鎖国」を体制として捉えることはしていません。1630年代に、後に「鎖国」と呼ばれる外交システムが完成したということです。対して「開国」についてはどうか、ということですが、1853年から、それまでとは明らかに違う方針転換がおきてくる。その後を段階的・構造的に捉える必要がありますね。たとえば、「薪水給与令」は一方的な給与で、^{あいたたい}相対的なものではない。これに対して和親条約は、もともとアメリカ側の草案は、自由貿易を前提に協定関税制・領事裁判権といった不平等条項も明記した草案で、24ヶ条からなっていた。これが幕府との交渉の過程で12ヶ条にまで絞り込まれていきました。内容についても、自由貿易を認めない官貿易という点では、今まで長崎で行っていたものとの幕府側の言い分が成り立つ余地が生まれることとなったのです。このあたり、幕府の交渉術の巧みさや外交能力の高さを示すものといえると思います。

司会：幕末明治維新时期、「尊攘派」の闘争から戊辰戦争に至る経緯についてはいかがですか。

原田：これはまさにテロリズムの実践で、当然それは鎮圧という動きを呼び、鎮圧に対してまた報復テロを起こすという具合に暴力の連鎖をよびました。池田屋事件はつなぎのような時期に起きたものと位置づけられ、その後は軍事に発展しました。幕府の制度疲労が背景にあったことも否めません。

大庭：「テロリズム」とは簡単にいうと、追いつめられたもの、力の弱いものが強いものに対して行うものですよね。そういう意味では、たとえば吉田松陰が「テロリスト」なのかどうかは疑問です。ただ周りがやっていることは暴力ですね。「尊王」「倒幕」と暴力が結びついていく。松陰自身が、テロを実践したことは、安政の大獄で刑死したきっかけも含めて無かったと思います。しかし、彼に教えを受けた連中のなかには、テロに走った者たちがいたことも事実でしょう。このことはまた、この段階（文久期）で長州尊攘派が置かれた政治状況が、一方でテロリズムを誘発せざるを得ないような状況にあったことを物語っているのではないのでしょうか。このころ幕府と朝廷の関係はと言えば、日米和親条約は幕府が調印し、朝廷には報告をただけだったのに、日米修好通商条約の際には勅許が大きな問題になります。これには政治的打算はもちろんですが、国是の転換があったといえるでしょう。1850年代半ば以降と60年代以降（特に文久2年(1862)以降）とでは、幕朝関係を含めて政治状況に大きな構造変化が起きていました。

司会：徳川慶喜については様々な評価があります。

原田：徳川慶喜は切れ者というイメージは持っています。徳川の統治体制を修正しなければいけないという動きはこの段階で避けられなかった。大政奉還というのは主導権争いとしての徳川慶喜の最高の打ち手であったらという見方をしています。

現実にあの時点の朝廷には政権担当能力はありませんし、統治システムそのものが存在しません。そのような中で政権を返されても困るわけで、実際に一部に断わろうという動きすらあった。そのあたりを徳川慶喜は見越していたと考えています。

それに対して、その時点では西郷、大久保、岩倉らは劣勢ですよね。そこで反撃しようとしたのが結局、王政復古の号令でしょう。今ではこれは軍事クーデタであったという理解が一般的です。ただこれは、軍事クーデタとしては失敗に終わっている。成功していたら、論理的に戊辰戦争にはならないということです。そこは大きなポイントだろうと思います。王政復古の号令が失敗に終わり戊辰戦争につながったということ、学校でもきちんと教えるべきだと思います。大政委任論、つまり朝廷が幕府に政治を任せているという、江戸期を通じて維持されてきた仕組みがひっくり返るわけですから、その

経緯に触れないで明治時代にってしまうのは、歴史の歪曲ともいえるのではないのでしょうか。

大庭：慶喜の評価について、どれが正しいのかというのはわかりません。ただ、少なくとも慶喜という人は非常に先によく見える人だったと思っています。彼は順境のときには強いですよ。ところがいったん逆境に陥るとすぐにあきらめてしまう。都合が悪くなると、そこで粘って状況を切り返していくという発想ができない人だったのではないかと思います。

慶喜が望んだかどうかわかりませんが、ほかに人がいない状況の中で、慶応2年(1866)12月に将軍になります。それは幕府という統治体制の幕引きをしなければ、というところまで含んだうえのことでした。だから慶応3年の慶応改革というのは軍制の面でもすごく進みました。一方では統治機構改革も進んで、いわゆる老中部局専任制という、後の内閣制度的なものまでつくるわけです。小栗忠順や、この段階ですと外交であれば田辺太一とか栗本鯤とか、ああいう親仏派といわれる開明派のエリートたち、彼らは幕権派とか幕府独裁派ともよばれているのですが、そういう彼らが、逆説的ではあるけれども、慶喜を支えるという体制ができてくるわけです。その後10月に大政奉還という話になっていくのですが、慶喜はいわゆる独裁体制を維持するという発想はありませんでした。にもかかわらず、幕権派とされる小栗たちを登用したのは、まず幕府の近代的な改革を成し遂げるために、当面独裁体制をとっても優秀な官僚たちを使わなければいけないと考えていたからではないのでしょうか。そういう点では人を見る目もある人だったと思います。

大政奉還に至っても、京都に詰めていた諸藩の重臣たちを二条城に集めて、大政奉還を明日する、ついでには何か意見はあるかと聞いています。西周が自伝の「西家譜略」に書いていますが、慶喜が大広間上段の間の敷居際のところに座り、すぐ下に小松帯刀がいて、平身低頭してボソボソ慶喜に語っていた。さらに同日の夕方慶喜は西周を再度呼び出して、イギリスの議会制度やヨーロッパの三権分立という考え方というのはどういう考え方なのかなどいろいろ聞いたといえます。明日大政奉還するという時にそういうことをしていた。この事実を一つとってみても、やはり慶喜は次のステージを考えていただろうと思います。

司会：そうすると徳川を中心とした……。

大庭：そうです。徳川を中心とした新しい体制を次につくるといことです。大政奉還するといっても、朝廷には受け取り手がないわけですから。当面、諸侯会同をやる、諸侯を上洛させ、そこで議論して決める、でもそれまでは慶喜が従来通りやってくれ、となる。岩倉や西郷にとっては、それでは元のもくあみですよ。それならクーデタに持ち込むというのが岩倉や西郷たちの発想だった。

原田：確かに、今の先生のお話で、徳川慶喜という人が逆境には弱かった、順境の場合は非常に切れ者でというのは私も全く同感でして、辞官納地の話がありましたけど、それも結局骨抜きになってしまいましたね。

大庭：そうです。王政復古の布告が出た以上は、幕府がなくなって新しい太政官代という役所ができて、総裁と議定と参与で重要な事柄については議論して決めていきますという方針が打ち出されますよね。

ところが辞官納地のやり方をめぐって大問題になる。これは中根雪江の『丁卯日記』に記述が出てきます。辞官についてだけなら、内大臣を辞めるといったら慶喜は辞めたかもしれない。しかし、領地を返上しろと言われて返上する、というのは、簡単に受け入れられない話でしょう。徳川家を支える経済的な基盤を何万石朝廷に返上しなさいと言われて「はい、わかりました」とできますか。幕臣たちも抱えているわけですよ。

そもそもあれは徳川家が武力で奪ったものでもないでしょう。そこで、山内容堂とか松平春嶽がまた頑張るわけです。いや、あれは元和偃武を実現した家康の意向に従ってみんなが差し出したものだから、朝廷が返せといったから返すというのは筋が通らない話でしょうと。

最終的に12月24日の段階で、朝廷が領地を召し上げるのではなく、その一部を徳川側からの申し立てで、差し出すというかたちをとりましようということになります。慶喜にとってはしめたものです。差し出すということは主導権が徳川の側にあるわけですから。それで一部を提供して、多くは自分の手元に残してそのまま実権を握るということですね。このように辞官納地の実態が空洞化、形式化されていくという流れになって、慶喜が新政権に復帰をしてくる、そうなれば結局また慶喜の主導権のもとで政局が運営されていくことになってしまうという、これが薩長の側の一番危惧した点だだと思います。

原田：そうですね。自分たちが劣勢であるという意識は西郷も大久保も、特に岩倉は持っていたと思います。この劣勢をどうするか。西郷は性格的に「短刀一本あれば片が付く」ということにもなりますし。

司会：そういう状況下で戊辰東北戦争に至ったときに、原田先生のご著書でも、奇兵隊が乱暴狼藉をはたらくとか、会津藩を徹底して許さないという話などが出てきますね。教科書には載っていませんが。

大庭：教科書は決められたページの中に収めるために何を残して何を落としていくかと考えたときに、あんまり突飛なことではできないというのがあって、結局特色のない文章にならざるを得ないのかなと思います。ただ、そこで落ちていった中に実は大事なことがあるかもしれないと考えることは必要です。教科書を見てみると、今までお話ししたようなその辺の駆け引きとか、特に小御所会議以降の徳川側の挽回の様子は書かれていないので、明治維新にすんなりいったというイメージを生徒は持つてしまうと思うんですね。

原田：江戸城無血開城についても、教科書にはさらっと書かれていますが、あれもかなり難しかった話ですね。

大庭：そうです。勝安芳（勝海舟）は場合によっては戦争をすることだって決断したかもしれないですね。あれはあくまでも結果として無血開城になったということで、最初からそういう筋書きがあったわけでは決してないと思います。

司会：薩摩藩の御用盗と呼ばれる強盗団の首魁・益満休之助を捕まえて、殺さないでそれを直接連れて行きますよね。駿府城にいる西郷のもとに、山岡鉄太郎（鉄舟）が連れて行って。そこで薩摩藩の非を言われて、西郷は焼き討ちは厳しいと判断したのかなと思ったりするのですが。

原田：もともとの赤報隊を抱えていたのは実は板垣退助です。それを薩摩が預かりました。そして、いわゆる赤報隊として江戸で蛮行を繰り返させたのは西郷です。西郷は幕府への挑発として、端から使い捨てのつもりで使っています。

その挑発に乗って、滝川隊が討薩表を持って大坂へ向かいます。そして、幕府軍は大坂から京へ向かうわけですが、戦闘部隊ではない滝川隊を、戦闘態勢を整えた薩摩軍が待ち構えていて、押し問答の末、薩摩軍の大砲が火を噴き、鳥羽伏見の戦いがはじまりました。この辺はやはり慶喜の武家の頭領として

の判断が甘かったと言わざるを得ないですね。ですから赤報隊の問題は、これはもう西郷が確信的にやり、挑発に成功したということでしょうね。

司会：それで東北に戦いが移ったとき、とにかく薩長側は会津とか庄内は許さないとなる。慶喜の恭順はとりあえず認めるけど、会津は絶対だめという、そういう構図になっていきますね。

原田：そもそも江戸開城以降のいわゆる戊辰東北戦争はそれまでの動きと違うと私は思っています。その時点ですでに政治勢力としての勝者は確定している。確定しているにもかかわらず戦いをやるというのは、結局あの時点の「正義の基準」がどこにあったかと考えると、これは朝廷サイドに立っているかどうかということになっていたと思います。これを「皇国原理主義」という方もいらっしゃるけれども、戊辰東北戦争というのは結局その原理主義の正当性を確認するための軍事行動ではなかったかと。とにかく政治勢力としてはもう勝敗はついていますから、主導権は薩摩・長州にあるわけですから。そこへどつと各藩がなびいていく。ですから会津攻めの時にあれだけの藩の藩兵が参加するわけで、確認のための軍事行動と見えています。

迎え撃つ方の会津にしても、既に恭順の意思を示していたわけです。終戦工作もやっています。奥羽越列藩同盟はそもそも会津藩救済のための同盟で軍事的に対抗するという同盟ではない。その位置づけはいわゆる佐幕軍事同盟みたいなものではなかったわけです。ただ、薩長サイドが強行したその軍事行動ゆえに起きた出来事が余りにもひどい残虐行為であったということは、記憶すべきことだろうとは考えています。

司会：その点は大庭先生はいかがですか。

大庭：奥羽越列藩同盟というのは輪王寺宮をトップに迎えて、対等に新政府側と戦うというものではなくて、基本的には会津藩を何とか助けたいという点で結び合いましたが、中では非常に温度差があったと思います。最後までやるぞというところから、本音ではあんまりやりたくないけど一応顔だけ出しておくかみたいのところまでですね。久保田藩（秋田藩）は早々に抜けて勤王藩だと言いながら、裏では自分たちの藩をどう生かしていくか計算していた。そういうところが多かったと思います。庄内藩のように、激しく抵抗したにも関わらずあまり減封されずに、廃藩置県まで残った藩もありました。

それに対して会津藩ですが、これは特に長州藩がいろいろ恨みつらみを持っていたと思います。

原田：薩長を中心として、その時点では土佐も入ってきていますが、彼らに対して「官賊」という言葉が会津城下で使われている。彼らは官軍を名乗っているが実態としては賊ではないかという思いでしょう。そもそも会津が京都政局の中心にいた時代に孝明天皇の信頼はかなりあつかったですね。それがありますから会津には「我々は官軍」というような思いはずっとあったと思います。それが「我々は賊」ということになる。対する敵が自分たちを「官軍」と言っているというところで、これは絶望に近い心境ではなかったかと思います。そこへあの凄惨な、それこそ女性も子どもも巻き込んだ戦いになりましたから、まさに絶望して斗南（旧陸奥南部藩領）に行っただと思います。

司会：先ほども出てきましたが、吉田松陰とか松下村塾全体についてはどのようなお考えでしょうか。
大庭：よくわからないというか、僕は個人的には吉田松陰というのはどうしても好きになれないというところがあるのですよね。ただ、松陰の評価すべきところというのは、決して攘夷一辺倒ではないこと。彼が抱えていた問題意識というのは、ああいう時代状況の中で、どういうふう近代的な主権国家というものをつくり出していけるのか、そのためには何が必要か、何をしなければいけないのか、ということにあります。そういう強い問題意識に駆られて活動した人じゃないかなと思います。

松下村塾にしても自分で立ち上げた塾ではないですね。その中心的な時期というのは松陰が野山獄で幽閉されていた時期に、彼のもとに連れだってきたような連中に、『孟子』とかそのような話をしていたということで、塾をおじの玉木文之進から受け継いで経営していたという体のものじゃない。幽閉という特別な状態の中でそういうことをする、ないしはせざるを得なかった。それは松陰にとっての時代ということだったのかもしれない。

歴史を切りひらく役回りをした人だという評価はきちんとすべきだと考えています。「草莽崛起」という話もありますね。高杉晋作に即していえば、そういう部分を受け継いで、正兵はだめだから奇兵で、というような話にもつながっていくと思います。

司会：幕府は一生懸命、何とか軟着陸を目指してやっているのかかわらず、とにかく洋人を殺せと

か言って騒いでいるというような、アジテーションがうまい人だったのかなど。原田先生は著書の中で「テロリスト」とおっしゃっていますが。

原田：皇国原理主義という言葉を使う方もいますが、もしその言葉を使うのであれば、吉田松陰はまさに極端に過激な皇国原理主義者だと捉えています。同時に、アジテータとしての資質は非常に高いものがあつたと。ですから、倒幕サイドに立ってみれば、果たした役割が大きいという見方はできるかと思います。南朝復興論者であつたとも言われていますが、私はそのことにはことさら触れる必要性は感じません。ただ、原理主義的な体質を無視して、単に人格者、教育者としてのみ美化するというのは、これは違うとは思っています。

松下村塾については、これはどこまでいっても玉木文之進の私塾です。ここで乃木希典も教育を受けていますし、陽明学を中心とした教えだつたと思いますが、少なくとも吉田松陰が主宰した塾でも何でもない。これは速やかに修正すべきだと思います。
司会：今日のお話にあるような明治維新のとらえ方を教科書や学校の授業の中に生かしていきたいですね。大政奉還から王政復古の大号令だとか、あの辺の時期をもうちょっと丁寧に表現するだけでも、生徒が自分で考えるようになるのではないかと思います。たとえば明治政府の中樞を担っていく岩倉具視が幕末期には何をしたのか、ひとつひとつ知っていくといろいろな面が見えてくる。その部分を丁寧に追うだけでもちょっと歴史認識が変わるかもしれないと感じました。

残念ですが、そろそろ時間もありますので、まとめをお願いしますでしょうか。

原田：あつたかもしれない「未発の可能性」に言及しますと、イギリス型公議政体といいますか、このとき小栗上野介が郡県制と同時に慶喜を大統領にという構想も持っていたことは『小栗日記』からもわかります。他にも、田辺太一、水野忠徳など阿部正弘時代以降の外交経験を積んだ優秀な官僚が存在していました。水野忠徳らの通貨交渉というのは見事だと思います。オールコックにしてもハリスにしても、水野と交渉するのは嫌だつたという事実もありますし、川路聖謨はプチャーチンとの交渉にあたりましたが、これは日本が外交交渉のみで明確な国境線を相手国と策定した数少ない例かと思います。

もし、このときイギリス型公議政体を作り上げ、

郡県制を採り、こういう優秀な官僚たちが分を果たすしくみができていれば、日本がスイスや北欧諸国に類似した独自の立憲君主国家となっていた可能性は十分あると考えています。

歴史だけではありませんが、学問は常に更新され続けますね。だからこそ一本の時間軸で整理する必要がありますし、「勝てば官軍、負ければ賊軍」という言い方が、御一新の直後から存在していること自体が何を意味するかを考えてみるのもいいのではないかと思います。「勝てば官軍で負ければ賊軍だよ」と言う中には、社会正義のありかについての「穏やかな疑問」があるのではないのでしょうか。後付けの正義というものに対して、ずっと存在した「穏やかな疑問」といいますか、それが150年弱続いてきたのではないのでしょうか。

私は善悪二元論ではなく普遍性のある見方はできないのかと考えています。たかだか150年弱の近代史というものを、善悪二元論を克服したかたちで整理して検証する。そしてそこから次に向けての青写真をどう描くかは教育の役割だろうという思いもあります。

司会：今の「穏やかな疑問を持つ」というお話ですが、今の生徒たちは、受験勉強で用語をたくさん覚えるか、勉強が嫌いな子は全くそこからは離れてしまうという二極化があって、その中で、歴史的なことは覚えるか覚えなかないかというだけが基軸になってしまっています。疑問を持つことすらしないというのが現場の課題だと思いました。

大庭：僕は大学の授業のはじめで、歴史学という学問は、一つは事実を確定するという作業が前提にあると言っています。その事実を確定するという作業のために史料というものがある。そして現在、史料は多様なかたちでとらえられるようになっていて。しかしそれは歴史学の意味の半分で終わっていて必要条件でしかない。

実は歴史学の本道というのは、そこから次に一つのまとまった歴史のイメージとか像というものを描き出すとかつくり出すという作業があって、ここには歴史観とかそういうものが関わってこざるを得ません。それがどこまで受け入れられるのか、どこまで説得力を持っているのかということが重要になりますが、しかし、必要条件の部分が無いがしろになってしまうと、いわゆる十分条件のところは成立しないというのが歴史学だということです。これは

歴史修正主義者といわれる人たちにも伝えたい。

そういう史料を見ていく中で、例えば、西郷と慶喜の二人について考えると、僕はやっぱり決定的な違いがあると思っています。慶喜は先が見えて、つまり近代的な改革というもののプロセスについても視野にちゃんと組み込まれていた。有能な開明的な官僚を配するというノウハウ、知恵もあった。

先ほど大統領制の話が出ましたが、慶応3年(1867)になってくると大政奉還が視野に入ってきて幕府のほうでも憲法草案をつくれという話が出てきます。西は11月に「議題草案」という非常に体系的な憲法草案をつくっています。それはいわゆる民に開かれたものではありません。しかし9月に津田真道が「日本国総制度」という憲法草案をつくります。そこでは日本の総人口10万人につき1人議員を推挙するといっていて、要は上院と下院の二院制を敷いて、上院は諸侯がなる、下院は国民の中から選ぶという内容です。それで、いわゆる憲法にのっとった政治の運営を行う。元首は「大頭領」。「頭」という字を書いています。そういう発想が既に幕府の中から出てきていた。慶喜はそういう中で立憲制に移行することを考えていたのではないのでしょうか。

しかし、一方でどんなに近代的な統治機構の整備をやっても有能で開明的な官僚をいっぱい配しても、近代国家にはやっぱりならなかったらうと考えています。その理由は、近代国家というのは国民が主人公になるものだからです。国民、つまり人民の力というものを一つにまとめていくという発想がないと、封建国家から近代国家には質的に転化しないと思います。慶喜には残念ながらそういう発想はなかった。たとえ迂遠な道であっても人民が主人公になるのが近代国家だから、そういうふうにしていかなくてはならないというところが見えないのです。でも西郷や大久保にはそのところがあつた。木戸は特にそういうところが見えていたのかなと、僕は思っています。

原田：確かに西郷というのは本質は農本主義ですよ。そういう違いも含めて、明治維新を今どう解釈するのかということが大切だと思います。

今日最後にお話ししたいと思っていたのですが、少なくとも歴史解釈において、どんなかたちにせよ、「官製」の歴史、官製教育というのは絶対あってはならない。どう解釈するにしても、それは官が官のために解釈することではないということですね。